サックリの分布図を読む

福　嶋　秩　子

1.はじめに

サックリとは北陸地方における仕事着の名称である。『新潟の生活文化』第２号（1995）に掲載された本会の山﨑光子会員による論文「サックリ文化の変容―三国を中心とするサックリの分布と系譜からみた―」[1)]（以下、「山﨑論文」とする）を読んだところ、福井県を中心とする地域のサックリの呼称の分布図とその素材の分布図が含まれていた（山﨑論文の図４－１および４－２）。私の専門である言語地理学においては、ことばの分布図に描かれた分布の様相をもとにその地域のことばの歴史を明らかにする。サックリの名称の分布図を作り直し、語源とされるサキオリ（裂き織り）からどのように変化し、この分布が生まれたかを明らかにしたいと考えた[注1)]。

なお、「裂き織り」は『日本国語大辞典』[2)]で以下のように定義されている。

古い布地を細長く裂いたものを緯（よこいと）として、山苧（やまそ）の渋染めを経（たていと）にして織った織物。農夫、山男などが着用した。さっくり。さっこり。つづれ。びろ織。

（福嶋注：やまそ＝からむしの別称）

また、「さっくり」は『日本国語大辞典』で以下のように定義されている。

古い布地を細長く裂いたものを用いて織った布。また、その布で作った丈の短い仕事着。

2.山﨑論文のサックリの呼称の地図を読む

まず山﨑論文の図４－１サックリの呼称の分布図を読んでみる（**図１**）。サキオリから、サッキョリを経て、サッコリ、サックリに至るのが、想定される自然な変化である。より古いと思われるサッキョリ・シャッキョリは能登に、その次に古いと思われるサッコリ・ザッコリは佐渡と能登、さらに離れて丹後の一部にある。サックリ・ザックリは石川県南部から福井県、さらに滋賀県と北丹後の一部にある。シャックリ・ジャックリはサックリ・ザックリの分布域内に少数分布し、サッキリ・ザッキリが佐渡、サクリ・ザクリは滋賀県北部、ザグリは石川・福井の県境にある。

日本の言語地理学は、民俗学者柳田国男の『蝸牛考』で唱えられた方言周圏論に端を発する。柳田はカタツムリの俚言の全国分布を元に、都から周辺に広がった俚言が多重の層をなし、周辺にある俚言の方が中心にある俚言よりも古いという論を唱えた。これが言語地理学の考え方では、中心部にB、周辺部にＡが分布するABA分布で、ＢがＡより新しいことになるとされる。

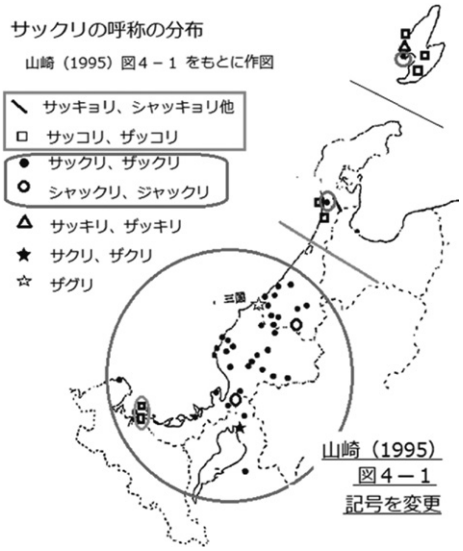

図１　サックリの呼称の分布：山崎（1995）図４－１を改変

翻って**図１**を見ると、サッキョリ・サッコリがA、サックリ・シャックリがＢとなり、サックリ・シャックリが新しいことになる。なお、能登と佐渡にあるサックリは、石川・福井に分布する語形が日本海航路（北前船）で運ばれたと考えておく。

3.全国分布の調査

さて、前節で見た呼称の分布を頭に入れたうえで、サックリの名称やサックリの表す物についての全国分布の調査を行った。

まず、ウェブで様々な辞書や事典を読むことができるジャパンナレッジで『日本国語大辞典』を調査した。「裂き織り」や「さっくり」をキーワードに検索をかけ、方言を集めた。次に、『日本民俗地図VIII衣生活』（1984）[3)]と脇田雅彦（1984）「サックリ考（一）（二）―岐阜県を中心に―」[4)]を読み、裂き織りやサックリに関する情報を集めた。上記の文献にあった名称と関連する情報をExcelでまとめ、各地点の緯度経度情報を取得し、ArcGIS Onlineというインターネット上で地図が描けるソフト（esri提供）を利用して分布図を作図した。なお、複数回答の記号は重ね打ちになっている。

ふくしま　ちつこ
〒950-8680　新潟市東区海老ケ瀬471
新潟県立大学
（新潟県立大学名誉教授）

4.裂き織り・サックリの名称の分布図を読む

図2は『日本国語大辞典』による裂き織り・サックリの方言の分布図である。サキオリが青森県、新潟県（佐渡・岩船）に、サッコリが佐渡、能登、長野県、静岡県に、サックリが石川県・福井県・岐阜県の連続した地域に、サクリが丹後にあり、サッキリが佐渡と能登にある。なお、ザックリが敦賀と北近江にあるが、これらはいずれも近世資料の貝原益軒『続諸州めぐり』（1713年発行）所収である。また、静岡県のサッコリは、同じ文献を参照している『日本方言大辞典』[5]によるとサッコリブトンという用例である。

この分布からも、**図1**で見た、サキオリ→サッコリ→サックリ→サクリもしくはサッキリという変化が容易にみてとれる。なお、サッコリとサックリを隔てる境界線をきれいにひくことができる。

図3－1は『日本民俗地図VIII衣生活』による裂き織り・サックリの名称の分布図で、単独形のみ作図したものである。名称が北海道から西は鳥取県まで分布し、**図2**よりも広い。サキオリは新潟県岩船、サッキヨリが富山県、サッコリが佐渡と能登、サックリが石川県・福井県・岐阜県の連続した地域に、シャックリ・シャクリ・ザックリ･ザグリがサックリに重なるように分布し､サッキリ・シャッキリが能登にある。さらに、サクリが滋賀県北部と鳥取県にあるが、これは北海道から青森県にかけての地域にもあり、さらにサグリが青森に、ジャクリが北海道にある。**図1・図2**で見た変化に加えてさらなる多様な変化（サ→シャ、サ→ザ、ク→グ、ク→キ）が北陸地方を中心に起きている。北海道･青森県のサクリ･サグリ・ジャグリは、北陸地方の名称が日本海航路により運ばれたと考えたい。なお、木綿古布の流通と裂き織りの伝播について日本海航路が果たした役割については、山﨑論文が既に言及している。

図3－2は『日本民俗地図VIII衣生活』による裂き織り・サックリの名称の分布図で、複合語の後半のみ作図したものである。石川県から福井県にかけての地域にのみ分布していることが注目される。また、ザックリ・ジャックリなど、濁音で始まる語形があり、その分布は単独形における濁音で始まる語形の分布とほぼ重なっている。連濁*により濁音化した複合語の語形が単独形でも使われるようになったのだろうか（連濁：二つの語が結合して一語を作るとき、あとの語の語頭の清音が濁音に変わること。『日本国語大辞典』）。その背景として次節で見る素材の多様化などが考えられる。なお、最南部にあるザックリは　近世資料のザックリ（敦賀）につながる可能性がある。

図4は「サックリ考」による裂き織り・サックリの名称の分布図である。サッコリの前段階の語形、サッキョリ・サッキョ―が富山県にあること、サックリ類の分布が北陸地方から岐阜県まで広がっていて、その中にサッコリ・サコリが残存的に分布していること、長野県から静岡県にかけてサッコリの分布があることが見てとれ

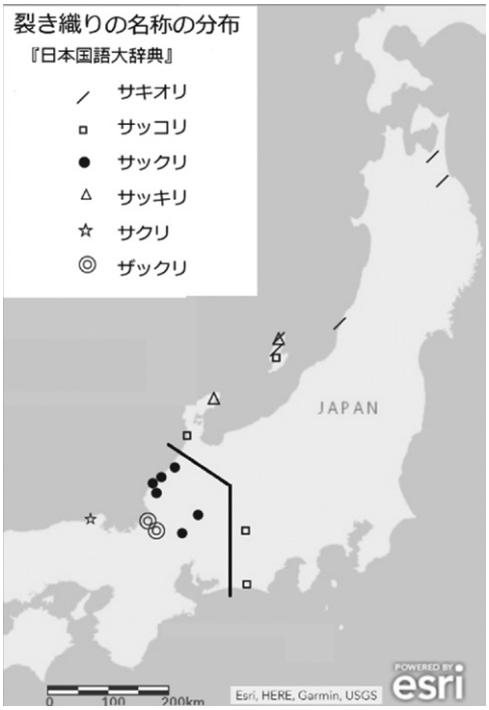

図2　名称の分布：『日本国語大辞典』

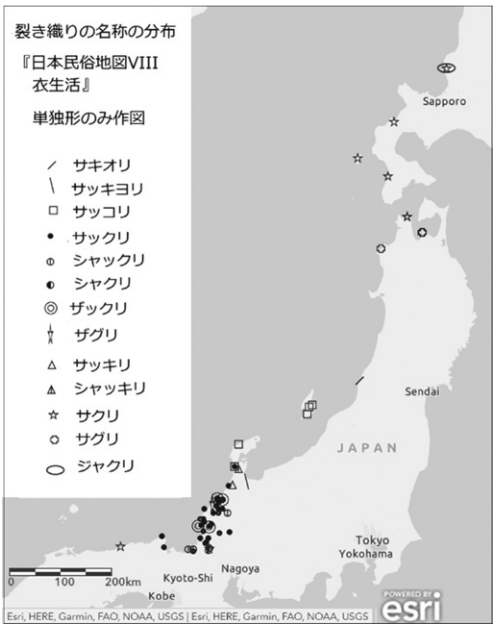

図3－1　名称の分布1単独形：『日本民俗地図VIII衣生活』

図3－2　名称の分布2複合語後半：『日本民俗地図VIII衣生活』

る。サッコリとサックリを隔てる境界線をしっかりとひくことができる。

本節の図の読み取りから、名称について以下のような変化が起こったと推定される。

サキオリ
↓
サッキヨリ
↓
サッキョリ → サッキョ―
↓
サッコリ → ザッコリ
→ サコリ
↓
サックリ → ザックリ
→ サクリ → サグリ ⇒北海道・青森へ
→ ザグリ
→ シャックリ → ジャックリ
↓ → ジャクリ ⇒北海道へ
サッキリ → ザッキリ

5.裂き織り・サックリの分布図を読む

『日本民俗地図VIII衣生活』120衣料の地図に裂き織りの分布が示されている。それによると、裂き織りは日本海側を中心に分布し活用されていたことがわかる。なかでも北陸から山陰にかけての地域に特に多い。しかし、山﨑論文の図4－2サックリの素材の分布図をよく見ると（**図5**）、裂き布は能登から富山県にかけてと福井県南部・滋賀県北部・北丹後の二か所に分かれて分布し、石川県から福井県にまたがる地域では、木綿布、カナ（木綿糸）、麻・オクソ（麻くず）、藤、こうぞなど多様な素材が用いられている。

この地域のサックリの実態は、『日本民俗地図VIII衣生活』の本文に、以下のように記述されている。

石川県津幡清水　木綿を切ってより、オ（麻糸）をタテにして、ネマリバタゴでマグサザッキリを織った。麻の皮をとって川でたたいてさらし、オワタにし、白い面のようなものを火ばしくらいの太さにして、オをタテにして白ザッキリを織った。

石川県小松安宅　大正初年まで麻・こうぞでザックリを織ったが、後に木綿に変わった。

石川県山中温泉真砂　男女とも夏に縦糸・横糸とも麻糸を用いたヌノサックリ、冬は縦糸に麻糸、横糸にオクソを用いたオクソサックリ、木綿製のカナサックリを着て、[後略]

福井県上一光　（かみいかり）　サックリのうち白ザックリは横糸がオクソで縦糸が麻で織られ、木綿ザックリは横糸が木綿で縦糸が麻で織られている。

福井県鹿俣　（かなまた）ヌノサックリは縦糸･横糸ともに麻で織り、木綿サックリは縦糸を麻で横糸を木綿で織った。

福井県山竹田　サックリには、布地サックリと木綿サックリがあり、昭和初年まで麻のサックリを着、その後に商取引で得たシャツ・ズボンになり、学童も洋服となる。

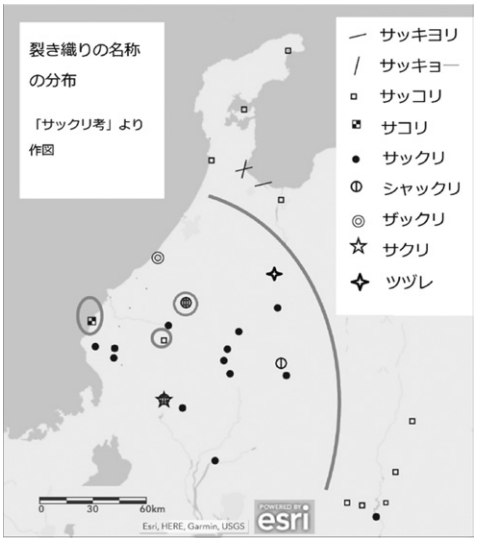

図4　名称の分布：「サックリ考」

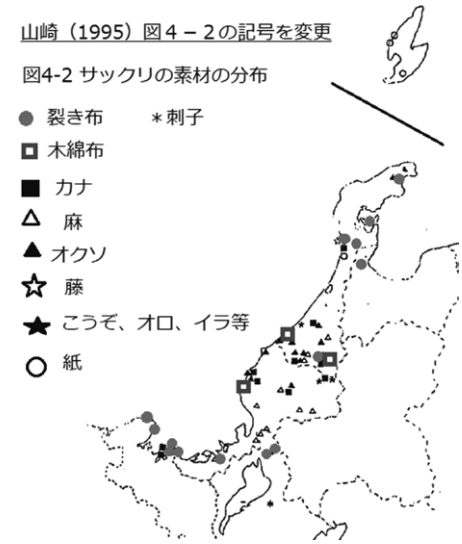

図5　サックリの素材の分布：山﨑論文図4-2を改変

『日本民俗地図VIII衣生活』の本文に出てくるサックリ類の複合語名称の前半部について地図化した（**図6**）。色・素材・形状を表しているが、いずれも北陸地方に集中している。サックリ類の語形の多様性が見られる地域と一致していることが興味深い。

図5で裂き布あるいは木綿布となっているのが本来の「裂き織り」である。一方、麻･オクソ、藤、こうぞ、オロ（あかそ）、イラ（いらくさ）等は、木綿布が流通する前に活用されたその地域に自生している植物であり、紙も切ってこよりを作り裂き布の代わりとして使われた。麻や藤などは本来の「裂き織り」においても縦糸として使われ､後に木綿糸が縦糸として使われるようになった。カナは木綿糸であり、縦糸・横糸ともにカナが使われた織物はカナザックリと呼ばれた。北陸地方は早くに裂き織りが伝わった地域であるが、天候の関係で木綿の栽培がほとんど行われていない（『日本民俗地図VIII衣生活』

による)。裂き織りに用いる木綿古布が若狭･丹後と少し離れた能登では流通し活用されたが、加賀・越前では従前の植物からとった繊維が使われ続けたということだろうか。

『日本民俗地図VIII衣生活』の本文で使われている裂き織りの名称の意味を地図化した(**図7**)。裂き織りもしくは何らかの織物を表している地点は全域に点在する。一方、作業着一般を表している地点は北陸地方と北海道から青森県にかけての地域に集中している。男の作業着を表しているのは佐渡と北陸地方であり、女の作業着を表しているのは北陸地方の1地点のみである。織物の名称であったものが北陸地方で作業着の意味に転じ、それが北へと広がったと考えられる。男女に関係なく作業着をあらわしていたのが古く、後に男の作業着のみいうようになったのは女性の作業着を別の名称で言うようになったからだろう。

6.まとめ

本研究は、日本の言語地理学の一つの成果である、民俗的事象の分布についての研究に属する。鳥追い歌の分布、小正月行事の分布などの研究がその例で、ことばの分布と民俗的事象の分布をあわせて検討するというものである。

裂き織りは北陸から山陰にかけての地域で活用されていたが、北陸地方では独自の発展をとげた。この地域では、まずサッコリ、サックリ、サクリ、ザックリなど名称が多様に変化した。この名称の変化により語源意識が希薄になり、本来の「裂き織り」でない織物や作業着を表す名称としても使われやすくなったのではないか。例:「男は木綿の野良着サックリを着る。」(福井県余呉･中河内)「男は素はだかが多いが､サシコ(サックリ)を着る人もあった。」(京都府京丹後･袖志)(『日本民俗地図VIII衣生活』)近世方言資料から18世紀にすでにザックリという名称が敦賀や北近江にあったとされるので、この変化は江戸時代後期までに起こったと考えられる。そして、北陸地方では、本来の「裂き織り」のみならず、麻・オクソや木綿糸等の多様な素材を使った織物や作業着もこの名称で呼んでいる。また、東北・北海道へは、織物のみならず作業着の名称としても広がっていった。

山﨑論文が言うように、裂き織りや作業着の伝播については木綿古布を流通させた日本海航路が一役買い、サックリなどの名称と共に広がった可能性がある。佐渡･能登のサックリ、北海道・青森県のサクリ・サグリがその例証である。『日本民俗地図VIII衣生活』に以下のような記載がある。

北海道寿都(すっつ)　男はサクリの上着や細かく刺してあるサシコを着る。女もサクリやサシコの類を着たり、ドウジャという消防のハン尺のようなものを着た。

青森県襲月(ほろづき)　麻は以前は畑に栽培し､繊維をとって糸により布を織って､サクリ(平常着か作業衣)に仕立てた。

図6　複合語名称の前半部:『日本民俗地図VIII衣生活』

図7　サックリ類の名称の意味:『日本民俗地図VIII衣生活』

参考文献

1) 山崎光子(1995)「サックリ文化の変容―三国を中心とするサックリの分布と系譜からみた―」『新潟の生活文化』2　20-25
2) ジャパンナレッジ『日本国語大辞典』
3) 文化庁編(1984)『日本民俗地図VIII衣生活』国土地理協会
4) 脇田雅彦(1984)「サックリ考㈠㈡―岐阜県を中心に―」日本常民文化研究所編『民具マンスリー』16(10)1-11・16(11)12-21
5) 尚学図書編(1989)『日本方言大辞典』小学館

注

1) 本稿は2022年11月6日に行われた新潟県生活文化研究会年次大会における著者の発表に加筆修正したものである。図の一部は新たに作成した。当日頂いた貴重なご質問やご意見に謝意を表する。